2021.3.6　中村哲医師メモリアルアーカイブス

追悼「中村　哲医師を偲ぶ」

2021 年 3 月 6 日　久山療育園　宮﨑信義（九大医学部の学友・教会の同胞として）

2019 年 12 月 4 日、中村哲兄がアフガニスタン・ナンガラハル州ジャララバードで活動に向かう車に同乗中、何者かに銃撃され、腹部・胸部に数ヶ所被弾し落命した。同乗の 5 人も死亡。35 年前からペシャワールでのハンセン氏病診療（日本キリスト教海外医療協力会 JOCS*から派遣）から山岳地帯での診療、軽症となった方々の自立のためのサンダル工場などの設置、初期から現地のスタッフの育成に努めていました。ソ連軍の侵攻やタリバン政権や複雑な部族間の争いから、300 万人にも及ぶ難民の生活の場を支援（井戸から用水路）し、現在では 65 万人の方々が緑野となった地で家族と暮らせるようになると聞きます。そのどこに中村哲君の殉難の原因があるというのでしょうか。悲しい、悔しい。涙が出る中で、イエス様の憐れみと受け入れ、そしてご遺族の癒しを祈りました。親しくして頂いた私の娘たちからもメールが寄せられました。その他多くの同級生や知人からも E メールが多数寄せられました。祈祷会でも主のおとりなしを切に祈りました。12 月 8 日には、中村哲医師の遺体が尚子夫人・長女の秋子さんと共に帰国し、12 月 9 日には、衆議院総会で、中村哲兄を追悼し 1 分間の黙祷が捧げられたと聞きました。多くの方々の尊敬と共観が寄せられたものでしょう。わたしは、哲君（哲ちゃん）の学生時代から海外医療協力に至る若き日々を知る者として、以下のように追悼の祈りと合わせて覚書を寄稿致します。

哲君は、1946 年 9 月 15 日、中村勉・秀子の次男として若松市（現・北九州市若松区）で出生し古賀市（当時は町）に転居されました。10 年以前にも、彼の特集が公開されましたが、昆虫（特に蝶類）採集に没頭していたことや、高校時代から既にフロイト（精神分析）や森田正馬（森田療法）などの精神医学書や、明治のキリスト者である内村鑑三全集を愛読していたこと、これは実家を訪ねて驚きましたが、本当に風貌とはかけ離れた広さと深さを感じました。JOCS*；JOCS：Japan Overseas Christian medical cooperative Service

古賀の実家は、「ひかり荘」という旅館を営んでいましたが、当時主な御得意さんの製紙工場は閉鎖間近ということで経営は苦しかったのではないかと思います。しかし気丈夫でやさしいお母さん(1966 年に逝去された中村秀子さん）と頑固そうなお父さん（中村勉さん、大戦前からの筋金入りの共産党員)、強そうな兄さん（中村透さん）に囲まれたありふれた家庭だった。それとはなく知ったところによると、ご両親は戦前の左翼青年と沖中仕の親分のお嬢さんであったとのこと。その親分は「花と竜」の玉井金五郎で伯父さんが作家の火野葦平（玉井勝則）ということであった。そのことを彼が全く誇る気配も見せないことと、その構成が彼の人となりに大きく影響を与えたことは想像に難くありません。彼の実家でも大変お世話になりましたが、親交を深めていくにつれて、彼の思慮深さや精神史に感動しました。

1966 年 4 月に九大医学部に入学（同期)。クラス 100 人のうち 2 人がくじ引きで定数 2 の学友会代議員となり、初めて中村　哲という名前を意識するようになりました。風貌はというと、ばさばさの髪に作業服、くったくのない表情、ただ言うことがやたらと革新的であり、聞けば「民青だ」と言うことでした。私は保守的であったせいか（後に変化するが）余り良い印象を受けなかったようです。しかし、クラス討議で議論がまとまらず、お互いに代議員であったこともあり、クラス討議の調整で話し合って見ると、なんとお互いにクリスチャンであったことを知りました。その後は、ふりだしに戻って親交を深め、私の下宿や古賀の彼の実家を行き来しました。YMCA での活動や学生運動も共に行動しました。1961 年 12 月 24 日、西南学院中学３年時に、香住ヶ丘教会にて洗礼を受けクリスチャンとなったことも聞き、その縁で私も同じ教会に転会致しました。

教養部から専門課程にかけて、当時は数年先の 70 年安保闘争を意識していましたが、日常的にはベトナム反戦運動や原子力空母エンタープライズの佐世保入港反対運動（九大 YMCA から現地へ)、大学二法案反対運動で専門性に埋没することなく、社会にも目を開いていくのが当たり前と受け止められていました。その過程でも彼の言動に一片の浮わついたものを感じなかった。彼の口癖でもありましたが、「見栄や衒いではなく・・」「金科玉条ではなく・・」が口癖であり、つまり真実を重んじ、論評だけの売名行為を軽視し､教条主義とも最も遠い人間であることは間違いないと思います｡この時、

同級生で九大 YMCA でも同じだった仲間に故・佐藤雄二君（40 代前半の若さで逝去）がいるが、彼は後年、中村哲兄の支援団体であるペシャワール会の事務局長として働くこととなりました。

九大 YMCA（KSCA）では、佐藤雄二君・佐藤誠さん御兄弟は、長く「筑豊の子供を守る会」で地道な活動をしていました。また中村哲君と私は、無医村診療などに参加したいと思っていましたが、残念ながら九大セツルメントや九大仏教青年会が実施しているばかりでした。そこで私たちは突拍子もないことを思いつき九大セツルメントの鹿児島県の無医地区診療に参加致しました。その他の YMCA の活動は、日常の読書会（マックスウエーバーなど）が主体でしたが、原子力空母の佐世保寄港に反対する意思表示で九大 YMCA から佐世保基地前のデモに参加しました。九州地区大学 YMCA の阿蘇夏期学校での滝沢克己先生の講演「インマヌエル」は優しい口調ながらとても内容が深く理解困難でした。しかし、九大 YMCA から参加した女子学生が山中に入り消息が分からなくなったために、夏期学校参加者が全員で捜索するというハプニングがありましたが、その学生も見つかり、その後は他学の方々とも気持ちが一致したことは懐かしい思い出です。中村哲先生の気持ちの中に『天、共に在り』の素地は、育った家庭や神経症的な苦悩（本人の話）からだけではなく、このような経験も形成されたのではないでしょうか。

1968 年 6 月 2 日 22 時 48 分頃、アメリカ空軍のファントム偵察機が、九州大学箱崎地区内で建設中の大型計算機センターの屋上に墜落しました。この時には、中村哲兄と共に名島の九大 YMCA 寮に入寮中で、墜落時の轟音を聞き、九大箱崎キャンパスに駆け付けましたが、通路を米兵が固めて私たちは自動小銃を向けられ、恐怖感と共に「日本は独立国なのか」と疑ったほどでした。

また彼の人柄の特徴の一つは、文章の簡潔さと共通して、金銭に対して淡白というか恬淡であり、お互いに貧乏学生であったが、何か食べようと言うと無造作にポケットからお金を取り出していました。お腹をすかしてもお金がない時は、ある者が出すといった具合でした。文章といえば、彼からの手紙は罫線のない白い紙に一見無造作に書かれたもので、所々に訂正した箇所がありましたが、実に簡潔で自然な文章でした。修辞文のような形容詞の多用や回りくどい表現は一切なく、それでいて美しく的を得た文章でした。これは、彼の著書を読んだり講演を聴いた方なら気がつかれると思います。

また語学については天性の才があり、受験や単位を取るためというものではなく、その言語を使う人や文化に興味があったのではないかと思われます。試験とは関係のないドイツ語会話に興味を持っていたことには驚きましたが、私はしばしば彼の語学の知識に助けられました。この延長線上が、バイリンガルどころかマルチリンガルともいうべき、現在の英語・ウルドゥ語・パシュトゥン語・ペルシャ語などの才に見られます。正に、今日までの 35 年間に用いられた天賦の才だと思います。

医療についても共通していました。高校時代からフロイトに関心があったようですが、その意志が精神科医を選び、神経内科の専門医を修得したものです。海外医療協力に携わると、現地の人々の必要（ハンセン氏病や結核～外科処置や救急医学）から、麻酔科・脳外科・実践的な内科学、そしてハンセン氏病診療開始後に日本では過去の技術となりつつあったハンセン病外科（下肢切断）などを海外で研修しています。当時の日本の医学医療は、正しく研修しようとすると、大学医局という閉鎖社会かそれに匹敵するような国公立病院や公的大病院に頼らざるを得ず、従属的な人間関係（誇張はあってもいわゆる「白い巨塔」「象牙の塔」）が形成されていました。彼はしばしば「まだ大学病院にいるの」と私に言ったように、そのような体制に囚われることはなく、その型破りがうらやましく、また患者の必要によって知識や技術を修得するのが医師の真実の姿だと思ったものです。

【写真】1971 年頃（25 歳頃の哲君）
－拙宅を訪問時。

1973 年 3 月に九大医学部を卒業し、国立肥前療養所に勤務されました。1977 年頃に私が偶然に出会った福岡登高会会員から「報酬は余り出せないが我々と一緒にヒマラヤに行ってくれるドクターを知らないか」と尋ねられ、「そのような物好きな医者はいないでしょう。いや一人いる。」と言って中村哲兄を紹介しました。哲君は当時、国立肥前療養所で精神科医として勤務していましたので、さすがに無理かなとも思いました。

1978 年、福岡登高会の同行医師としてヒンズークシ、ヒマラヤのティリチ・ミールへその後の経過は彼の著書に詳しく書かれていますが、行程で出会った現地の人々の病気に苦しむ姿と純朴さに心打たれ、再会を約したとのことです。

医師の場合、一人前になるためには大学病院などしかるべき医育機関で長期間の研修を必要とされ、それが大学医局の封建制に組み込まれたり、偏った専門志向に繋がるという弊害がありました。中村兄の場合は真逆で、医療を必要とする人間の側のニーズに自分を合わせるといった進路の選択をしていたようで、羨ましい限りでした。内科的な知識・技術が必要であれば大牟田労災病院や徳州会病院へ、麻酔や脳外科が必要であれば久留米大学へ、ハンセン氏病による機能障害や壊死の手術の技術習得のために韓国へといった具合に、人間の思惑ではなく医療本来の必要に応じて学びを進める、実に爽やかな印象を与えられた。それを世間は変わり者と言うわけであるが、なるほどこのように当り前な選択も彼ならではの決断を必要とするものかと改めて思ったものです。

［海外医療協力へ］

国策以外で海外医療協力を行なっている組織は、日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）しかなかったこともあり、JOCS にワーカーとして働きたいと申し出られました。JOCS では総主事を勤められた塩月賢太郎先生や奈良常五郎先生、先輩ワーカーの岩村昇先生など尊敬する方々がおられ、ペシャワールからアフガニスタンへの道が少しずつ開けていくようでした。派遣支持教会として香住ヶ丘バプテスト教会、そして同教会の「中村哲兄を支える会」が発足し、後のペシャワール会の一角を担いました。ペシャワール会は特定の思想信条や宗教からなるのではなく、中村哲医師の活動に共観し支援するという多様さが大きな力として結集していくことになりました。

1979 年 11 月 17 日に、中村哲君が宮川尚子さんの結婚式が香住ヶ丘バプテスト教会で行われました。お二人は勤務されていた大牟田労災病院で知り合われたわけですが、当時の哲ちゃんはとても嬉しそうにしていました。

その後の歴史は急展開し、1979.12.24 にソ連軍がアフガニスタンに侵攻。1983.4　JOCS 理事会にて JOCS ワーカーとして派遣決定（福岡徳州会病院勤務中）。1983.5　外国語研修のためロンドンへ（３ヶ月間の英語研修）。1983.9　香住ヶ丘教会に「中村哲兄を支える会」が発足しました。1984.1　熱帯医学校（リバプール）。そして 1984 年 5 月から JOCS 派遣ワーカーとしてペシャワールへ赴任されました。1984 年 5 月 6 日にペシャワール会総会でより広い支援する会が発足し、教会関係者も喜んでその中に参加致しました。JOCS を基盤とした海外医療協力に教会が果たした役割は必要なものでしたが、ペシャワール会が発足した後は共に支援していく、特定の宗教や信条・主義にとらわれないことは、中村医師の活動を必要とする人々を中心としたより実効性のあるものにという哲兄の活動と支援を確かなものにしていくことになったと思います。今、思うとペシャワール赴任当時の JOCS は奉仕者は送っても経済援助や物資の支援には強い制約が課せられていました。しかし、アフガン難民の生命を守るという支援に進んでいくと、先進国の主義主張ではなく、命を支える支援が為の水や用水～農地が不可欠なものですが、これらの活動の支援は、ペシャワール会が担っていかれました。教会は離れたのではなく、むしろ喜んでペシャワール会に入っていったと思います。発足後のペシャワール会の活動拠点となる事務所も、福岡市中央区大名にあった YMCA 会館（志満秀武総主事）が快く提供して下さり、また活動の便宜も図って下さったようです。YMCA 会館で英語研修を受けておられた方々や熱気球の会の方々など、それこそ「特定の宗教や信条・主義にとらわれない」多くの方が支えて下さったのです。

ペシャワールに赴任後、哲兄は急性肝炎に罹患しました。2 クール（8 年間）の JOCS 派遣ワーカーの勤めを終え、その後はペシャワール会からの派遣として事業を継続しました。現地の人々の必要に応えるという哲兄の要請に、ペシャワール会は今に至るまで物心両面で支え、そして協働されました。自分の生活は馬場脳外科での非常勤医師として生計をたて、ペシャワールやアフガンでの働きは、ひたすらボランタリズムに則ったことも、いかにも彼らしい生き方でした。ただハンセン氏病診療だけ

でなく、靴工場の建設に代表される患者の生き方にも目を向け、薬や医療器具がないからといったことを理由にせず先ず始めるという在り方も実に彼らしいものでした。

【写真】宮﨑信義宅にて：
宮﨑智子（私の妻）と中村哲君（1994 年）

【写真】教会の守る会の友人と会食（2009.11.19）
中村　哲・児嶋　博・宮﨑信義

1988 年 5 月にソ連軍が撤退開始（1989.2　撤退完了）、1991 年にはアフガニスタン北東部の 3 診療所を基点として山岳無医地区の診療活動開始し、ALS を JAMS（Japan-Afgan Medical Service）と改名し、アフガニスタン支援を現地の人々と共により積極化していきました。1997 年にはハンセン氏病登録患者は 6,000 名以上（未治療者は 20,000 名を超えると推定）で、ペシャワールに 2 ヶ所の病院、パキスタン～アフガニスタンに 5 ヶ所の診療所で対応し、現地職員は 150 名以上に達すると帰国報告会で伺いました。1998 年 4 月にペシャワールに基地病院 PMS＝Peshawar Medical Services（70 床、建坪 1000 坪）を建設し、これには日本の市民から 3,500 万円の援助（資金の 70%）があったとのことです。

2001 年～カーブルに臨時診療所設立。2001.9.11　米国で同時多発テロ発生し、タリバン・アルカイダへの制裁という理由で広範囲の爆撃がありました。ソ連侵攻～内戦～国連（米国による）報復で約 200 万人の死者と 600 万人の難民が生じたとも報告されました。

彼の立ち位置は学生時代から変わらないと思ったのは、医療活動にとどまらず、被害者ともいえる難民の方々の生活をも支えることに何の矛盾も感じず、実践していったことです。しかも現地の人々や日本からの支援、伝統的な治水技術の活用など、医療の方法論とも一致しています。2001 年からアフガニスタン国内に井戸（1,400 ヶ所以上、目標 2,000 本）掘削、水路建設など、現在は用水路によって約 65 万人が帰還できているとのことです。具体的な活動については、他の証言者や著書をお勧めします。

2002 年 12 月 27 日に 10 歳という若さでご次男が脳腫瘍で亡くなられた苦難の時もアフガニスタン支援を続けておられた哲兄が 2019 年 12 月 4 日に凶弾を受け死亡したことの意味は、「神様、なぜこのようなことが起こるのですか」と問いつつ、彼の止むに止まれない心情を現わしているのかと悲嘆のうちに思いました。今はただ、ご家族の慰めと癒し、御国での再会を祈ります。

＜暗殺事件の経緯＞

2019.12.4　中村　哲君：同日午前中（日本時間で 12 時ころ）にアフガニスタン・ナンガラハル州ジャララバードを活動の為、車に同乗中、何者かに銃撃され、腹部に 2 ヶ所被弾し落命した。同乗の 5 人も死亡。35 年前からペシャワール（JOCS から派遣）、そしてアフガン難民の生活の場を支援（用水路など）。イエス様の憐れみと受け入れを祈る。

2019.12.5　アフガニスタン・カーブルに尚子夫人・長女の秋子さんが向かった。

2019.12.7　午後、「週刊文春」斎藤史朗記者が来園し取材。

2019.12.8　夕方、中村　哲医師の遺体が帰国→12.9　午前中　福岡へ。
2019.12.9　衆議院総会で、中村　哲兄を追悼し1分間の黙祷が捧げられた。
2019.12.11　13：00～　中村　哲君の告別式：ユウベル積善社福岡斎場（中央区古小烏町70-1）
遺族挨拶：中村　健（長男）

＜2019年12月現在の活動成果＞

1,600本の井戸で渇きが癒された。しかし井戸は枯れる。クナール川から約25Kmの用水路（マルワリード用水路※注）建設で16,500haが砂漠から緑地・農地に変わり、約65万人が帰還し生活している。
※注　2013年9月にマルワリード用水路末端から用水路（シギ分水路）を2km延長し、以降用水路の全長は27kmとなっている。2019年までにマルワリード用水路他9か所の取水設備が建設された。

＜遺したことば＞

「人は愛するに足り、真心は信ずるに足る」
「一隅を照らす」ことに倣う。
2020.6.10　NHK「歴史秘話ヒストリア　最澄＝天台宗開祖、比叡山延暦寺」の中で、中村哲君が最澄の「**一隅を照らす**」という言葉を引用していたことに言及された。哲君の35年間に及ぶパキスタンやアフガニスタンでの支援活動が正しく受け取られていることに喜ぶ。
「Just　do　it.」：語るよりも行うことを。

＜2019年12月4日　殉難後の動き＞

・「ペシャワール会」（日本及び現地スタッフ）が中村哲医師の遺志を継いでいくと決意。
・長女の秋子さんも「ペシャワール会」事務局に参加。
・35 年間のパキスタン～アフガン支援（医療にとどまらず生きる場の開拓、生活基盤である水路）は日本にとどまらず、世界中に共感を呼んでいる。